

# 利尻島出征者によるシベリア抑留手記

吉田欽哉

〒097-0311 利尻郡利尻町仙法志字神磯

## Memoirs of a Rishiri Island Soldier in a Siberian Internment Camp from 1945 to 1949

Kinya YOSHIDA

Kamiiso, Senhoshi, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0311 Japan

**Abstract.** After World War II, 575,000 Japanese soldiers were taken captive by the Soviet Army. The author was held captive in Siberia from 1945 to 1949. This is a revised version of a self-published book (Yoshida, 2009) based on his experience story during those years.

### はじめに

第二次世界大戦の終戦直後、日本人兵士が捕虜となり、シベリアなどを含む旧ソ連やモンゴルの地域に約57万5000人が強制抑留された（厚生労働省，2018）。利尻島の南部、仙法志字神磯生まれの筆者（1925（大正14）年11月1日生）は、1944（昭和20）年3月15日に樺太上敷香歩兵第42部隊に入隊し、上敷香陸軍病院にて衛生兵として軍務についた後、終戦後は旧ソ連の捕虜としてシベリアに抑留された。抑留生活は1945（昭和20）年8月から1949（昭和24）年7月の4年間に及び、ハバロフスク地方や沿海州の各地を移動しながら、過酷な環境の中、様々な労働を強いられた。この時の体験を思い出しながら、2009（平成21）年12月1日から10日にかけて執筆したものを、抑留手記として自費出版した（吉田，2009）。本稿はこの手記を見直し、写真や地図などを新たに加え、時系列順に再構成したものである。一部、記憶が定かでなく、事実や年が前後している可能性があるほか、わかりにくい表現は書き直しや追記を行なったが、当時使われていた言葉や利尻ならではの言い回しを記録するために、あえてそのままにした表現もある。また、現在では差別用語となっているものについても、

当時の状況を記録する意味で残してあるが、筆者に差別を助長する意思は一切ないことをご理解いただければ幸いである。

### 1944（昭和19）年

#### 徴兵

戦争もだんだん激しくなり、昭和19年の春頃に徴兵検査も20歳から19歳の検査になった。たしか19年の春頃かなあ。第一合格者の中に加わり、「あゝ兵隊に行くんだなあー」と思い、複雑な年頃、19歳。

そんな時なあ、藤井幸二郎さんが帰って来て、軍服姿を「立派だなあー」と思った。岡山勇さんの兄が衛生伍長で、長いサーベル提げて政治の家に入るのを見たが、その姿を見て、「やあ大したもんだなあー」と思った。今でも目に浮かぶなあ。

徴兵が決まった。来た通知は衛生兵で、その時はがっかりしたな。まさかと思った。普通科の歩兵だと思っていたのが衛生兵に決まり、ガックリした。級30名いたが、俺と長浜の石垣鉄見の2人だけよ。その前に、神磯の同級生加藤が、歩兵で入隊が11月頃かなあ、祝いでやるべと、犬の肉でカレーを作って、みんなで美

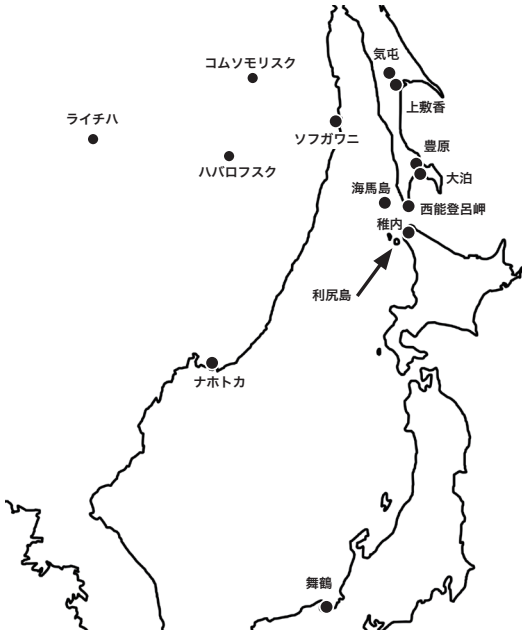


図1. 戦中および抑留中に筆者が訪れた主な場所。

味いなあと食べた。あの時家に10人くらい集まったかな。加藤は生肉大嫌いで、知らずに食べて後でひどく怒られたなあ。加藤は旭川から中国に行った。

6月頃、本町で菜や雑貨を売っていた川口（政泊の駒井アサさんの母さんの兄）が衛生上等兵で、「欽哉お前、衛生兵と云うのは歩兵より階級上がるのが遅いから、勉強しないとだめだから、本をやるから今から勉

強しろ」と、本を貰って毎日勉強したなあ。それと、「軍隊は"運隊"と云ってなあ・・要領を良くしないとだめだよ」と聞かされ、それが現実となったなあ。

1945 (昭和 20) 年

出征

3月15日、いよいよ出征の時が来たね。その時はなんとも思わなかったな。山本良吉部落会長が家の前で、武運長久を祈ると挨拶。それから今の利尻町公民館の前の「佐孝の澗」から船が出て、稚内行きの船に乗ったんだ。幾時間掛かったかな。伊藤の澗（「佐孝の澗」の北側に位置する澗）で父がナマコ（ニシン漁用の小さな漁港のような「袋澗」の一部で、石を積んで作られた防波堤）の一番先端に立って旗振ってたなあ。その時、おそらくこれが最後かと思って旗を振っていたのかなあ・・と思う。今でも思い出せば脳裏にその時のことが浮かんで来るなあ。稚内集合のため、稚内に着いたその晩、水巻が丸通（全国地区通運協会）に働きに来ていたんだね。出征祝いだと、鯛のカマボコで祝ってくれたなあ。あの頃砂糖が不足した時代だから旨かったなあ。今の稚内の北防波堤ドームの所に駅があつてなあ。そこから連絡船「樺太丸」に乗って大泊（現コルサコフ）に着いた。船の中でニギリメシを塩っぱいカンカイ（コマイという魚）のおかずで食べ

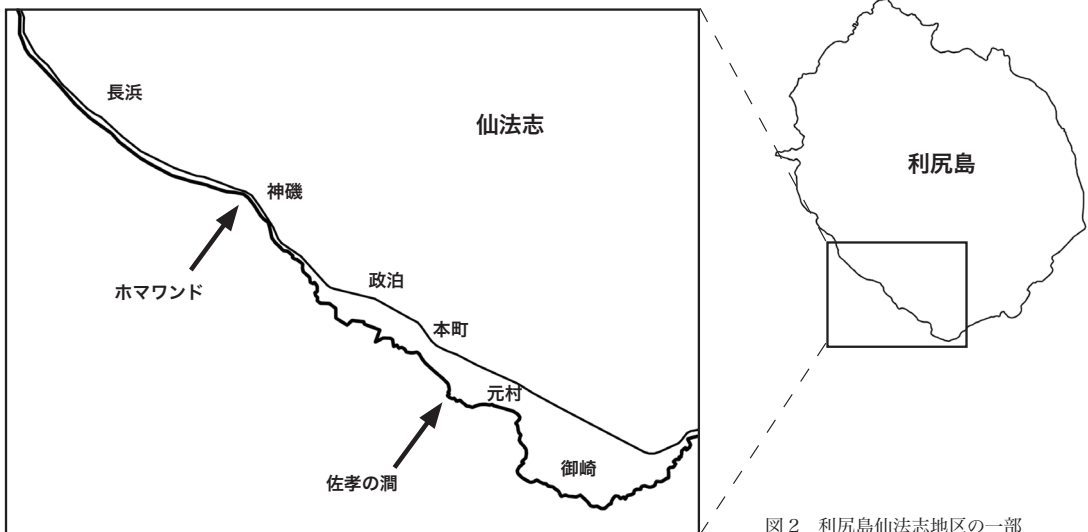


図2. 利尻島仙法志地区の一部。

たけど美味かったな。

### 稚内から樺太へ

大泊から上敷香陸軍病院まで幾時間かかったかな。汽車の線路が波打ち際にあり、辺りは木の株だけ。病院に着く前に12中隊に行く事になり、歩兵の教育3～5ヶ月位かなあ、初年兵は2班までで30人位いたのかな。初めて見る顔、農家や事務員、漁業は俺と石垣の2人だけ。樺太から入った人の中に漁師は3人位いたかな。歩兵の教育だから大変なんだ。自分の物の整頓、少し悪いと全部落とされて、その上ビンタが飛んで来る。歩兵教育では先輩から、「要領が軍隊だ」と聞いていたから、その点は上手だったね。下手だったのは、今でも玉ねぎを送ってくれる同年兵の佐藤（篠路出身）で、ご飯時に大きな声で「今カワヤ（便所）に行ってきた」と馬鹿正直に言っっては上官からビンタを貰っていたなあ。歩兵の演習も頻繁になり、毎日演習。4月半ばはまだ雪が多く、その上を匍匐前進。やぁ一大変だった。ある時、最後に隊の前に出され、隊長からオホメの言葉を頂いたのを思い出すなあ。12中隊60名余りの中で前に出され、ホメラれたなあ。思い出す、思い出す。

### 陸軍病院配属

いよいよ自分達の兵科である陸軍病院へ。まず第一に食べる物が歩兵と全然違い、白いゴハン。ビックリ驚いた。「さすがは病院だなあー」と思った。

さて、それからが大変。勉強、勉強の毎日。樺太の夜明けは早く、5月末ともなれば3時ころには少し明るくなるのでソーツト起きて、便所に行き勉強したもんだ。親が頭なくても本人の強い意思で勉強したら出来るもんだよ。班でも1番か2番位。仕事は今の看護師と同じで、それは大変だった。やはり階級の星数をひとより早く多く、上等兵になるのが目的で、衛生上等兵なら大したもんだからね。そのうちに配属となる各所が決まり、俺は薬科の方。病棟勤務の方がおかずを食べられたりと余禄があったが、薬科はなんにも余禄がない科で、朝、牛乳を殺菌するだけ。それを薬缶に取って隠れて飲むだけだった。勤務は薬局の方だから各科から薬の処方箋が来ると、それを見て薬をつくる。あの小さい秤の目盛0.1g、0.01gを3つから4つ量って



図3. 出征時の筆者。

搦鉢で搦り、1回に50袋位作る。その時上官が側に付いていて、遅いと長い棒で手の甲を叩かれたよ。俺は太い指でも早かったな。親に似て手早かったなあ。病棟つきの戦友から、たまに汁粉をヨッコした（くすねた）ものを貰って食べた。美味かったなあー。

8月9日からソビエトが参戦のため樺太国境付近に侵入して、だんだん戦争も激しくなったなあと思った。陸軍病院に戦地で怪我した兵隊がどんどん入院する様になった。いよいよ来るべき時が来たのかなと思った。

そのうちに国境付近の野戦病院に行く事が決まり、総勢50名、その中に俺も入った。その時に、遺骨の代わりに髪の毛と爪、名前と住所を紙に書き、袋に入れるよう言われ、とうとう死を覚悟した。旭川の本林と言う奴が室に来て「行ったら死ぬ」と云って一晩泣いたよ。次の日の出発だったが、急に中止になりホットした事だ。毎日兵隊が入院して来て、いよいよソビエトとの本格的な交戦が始まった。日増しに戦闘が激しくなり、国境方面から傷ついた兵隊が多くなったが、俺の任務の薬の方は普段とそう変わらない。薬局の中に初年兵が3人、看護婦が2人居たな。女の人は樺太の出身で、敷香町の気屯（けとん）方面（樺太のソビエト国境近く）だった。

### 豊原の仮設病院へ

いよいよ噂が出て来て、病院も南下すると云う話が

広まり、豊原（とよはら、現ユジノサハリンスク）方面に仮設病院を造るとか・・・さて上敷香から豊原まで汽車で行くのかなと思ったら、夜は危険だからと昼に出発。駅で、看護婦2人が行く所がないと泣いていた。あの後どうしたのかなあー。豊原第二小学校に仮設病院を設置。近くの民家は逃げて誰も居ない。家の中の小屋にはウサギが居て、死んだまま。昼は畠に入って畠物腹いっぱい食べて満腹。小学校の2階の窓から外を見ると、見渡す限り平地で畠また畠、所どころに馬牛が数多く見えた。

### 終戦

8月12日頃、豊原第二小学校の各教室には20人位入っていたかなあ。ソビエトが戦線に加わり攻めてくるとか噂が広がっていたが、病院だから心配ないだろうと思っていた。8月15日だと思うが、みんな講堂に集められた。天皇陛下より終戦のお言葉があり、講堂内は泣く人や、喜んでいる人などで、大騒ぎ。「やあ、これで戦争終わったんだ、やあ還れる」と喜んだ、喜んだ。

### 武装解除

8月18日。そうしているうちに、ロスケの軍隊が入って来て武装解除。鉄砲も拳銃も全部集められて、小部屋に入れて鍵を掛けた。小学校の外は塀が造られている。将校は朝から酒飲んで居たし、俺達は日中風呂の火焚きだ。起き出して、炊事場にぶら下がっていた牛肉かっぱらって来て、そこで焼いて同年兵2人でよく食べたなあ。畠に行けば幾らでも牛が居て、自由に捕まえて来て殺して食べた。

だんだん頭が良くなってな、俺達は階級1等兵だから階級章取ったよ。誰が上等兵だか1等兵だか判らないからなあ。面白かったな。「廊下に出ろー」と俺達が云えば、白衣着た上等兵やら伍長やらが出て来るし、「各室から2名風呂の火焚きに出ろ」と云うと、「ハイ」と云って出て来て風呂の火焚きだ。面白かったなあー。1等兵が伍長を使うのだから、軍隊だったら世の中逆様になるよ。

ロスケの兵隊は、毎日病院に来ていた。豊原と云う町の駅は広い所だ。道路の幅が広いのではじめはびっくり。何日か経ってから、豊原の横山（母の妹）の住

所知っていたから尋ねて行ってみた。消防櫓の直ぐ傍で、父さんは魚屋さんをやっているとか。尋ねたところ、母さんと子供たちは内地に帰ったと云って、父さんと長男の新一の2人だけ残っていたなあー。新一は俺の従兄弟にあたる。その時、やはり俺の親戚にあたる梅田の誠（本名は牧野であるが、なぜか梅田を名乗っていた）がいて、「稚内さ戻る」と隊から逃げて来たという。

「欽哉、お前も逃げれ、ロスケに捕まったら直ぐ帰れないぞ」「でも俺達は軍人だし衛生兵だから、病人もいるし、他の兵隊と違うべ」と、2人の前で云った。父さんからご馳走になったのは汁粉だったと思う。2人に、何か葉あるかと聞いたら、なんにも貰ってないと云うし、よしそれなら2～3日したら塀の外に來い、と塀の内から胃の葉3か月分くらいかな、作って投げてやった。小学校の周りには塀が出来たので、「新一」と叫んだら「オー」と応えたので投げてやったさ。胃の葉は、直ぐ分かるんだ。カルテ見ると全部日本語で葉の名が書いてあるから、各ビンから取って挿り鉢に入れて、挿りこぎで挿って、葉紙並べて100余り作ってやった。横山の父さんは昔から胃の悪い人の様だった。なお、利尻に戻ってだいぶ経ってからのこと。大阪の帰りに新一の所に寄った時、その時の話をして彼は泣いていたなあ。それが新一との最後の別れとなってしまった。

### 豊原駅前襲撃

終戦後の8月22日、ロシヤの戦闘機が2機飛んだ。なんだ戦争終わったのにと話していたら、その時駅付近に爆弾が落ちて白い砂煙がババッと上がった。駅には何百人と云う人が居たと、急いで救助に出ると、俺もチャッカシ（あわてもの）だから、急ぐ車に乗って出た。3分も走らないうちに飛行機からババッと撃って来て、車止めて近くの防空壕に飛び込んだ。飛行機の爆音が聞こえなくなって駅に行ったら、土を被った死人の山。中に一番目に付いたのは、リュックを背負って頭が無い死体が、胸に2歳か3歳位の子供を抱いていた。少し離れた所で5歳位の女の子が泣いている。見ると左手のひじから下が飛ばされて無くなっていて、俺は急いで救急帯で縛って豊原中央病院に連れて行ったら、地下に行けと云われた。地下では呻く人、泣き叫ぶ人がいっぱいいて、まさに生き地獄とはこの様なものか

と嘔然とした。病院の中は怪我人や救急の人で廊下も歩くところが無い。何十年も経った今でもあの時の記憶は消すことが出来ない。あそこで死んだ人は何百人だったのか、誰が知っているのか。終戦で全て終わりだと云うのに、あそこで死んだ人達や家族は、その後どの様になったのか、引揚者達や国で調べてほしいものだ。

駅で傷ついた人達を車に乗せているうちに、又戦闘機が轟音を上げてやって来た。たしか伍長だった人だと思うが、駅前の防空壕に入ろうとしたら、中には死人や呻き声をあげる怪我人が居たので、伍長は「だめだッ」と云って、それとは別の防空壕に俺とともに飛び込んで行った。民間人はずうっと奥の方に居て、俺たちは一応軍人だから奥にも行けず、入り口の方に居た。あとで分かったことだが、その時吉田先生（後日、仙法志小学校に赴任）の奥さんが、まだ学生であの防空壕に居たのだと云う。なんだか兵隊さんが2人程入って来たと、帰国後、先生が家の昆布乾しに来てから分かった。飛行機の音がしなくなって出てみたら、今まで有った駅前の防空壕は爆弾で全部潰れ、中の人は全員死んだ。俺達2人も入っていたら死んだなあ。戦争の怖さ。戦争は二度とする事はないと思うが、今の人たちに訴えたい。戦争は何のため、誰の為と・・・

終って帰ったら、玄関に塩っぱい鱒の切り身と握り飯があつて、腹減っていたからなんぼ食べたのか。そして皆のいる所へ行ってヤレヤレと思ったら、手が血で真っ赤。急いで洗った。腹減ったら血も砂も何も気にならないな。夜に小便したくて起きたら、駅前で首が飛んで子供1人抱いていた女の人が目に浮かんで、オッカナクで1人で便所に行けず、戦友起こして2人で行ったなあ。その後は何も無くて平穏な生活。

## 大泊への移動

9月上旬頃。その内に、北海道に帰れると云う話が出て来て、近く大泊に行くんだと云う。豊原から大泊までは1日では行けないと云う話。そしたら沢の水は飲んだら腸チフスになるから絶対飲むなどのこと。途中で泊るとか、どこに泊るのか、汽車で行くのか行軍か、誰も分からない。俺は薬局だから何も持って行く物が無い。そうだブドウ糖があると思い、大きなビンから誰も見て居ない便所に持って行き、そこで袋に入れて腹の中に隠

して、誰も居ない時に飯盒の蓋に水少々入れて5分するとパンパンに固くなるのよ、俺、頭良かったんだなあ。

その後も、誰も居ないのを見ては薬局に行き、3度位ブドウ糖を同じ様にして溜めた。若しも行軍だとしたら何時間掛かるか。水はダメだと云う。その内に移動が決まり、病院が大泊に移ると命令が出た。その時兵隊は必ず毛布2枚持つ事と、「オーイ毛布なにするのよ」色々な話が・・・

「変だな北海道に帰るのに毛布」なにするのかなあ」とみな思った。9月に入って移動命令が出て、いよいよ豊原から大泊まで行軍と決まった。衛生兵は最後の列になった。夏の行軍だから暑い暑い。全部で500名位かな、日本中からの兵隊、各小隊、なかには将校の荷物車を曳いた兵隊もあった。途中で休憩しても水は飲めない。だがブドウ糖舐めてたらなんとか水飲まなくても良かった。

夕方、豊原と大泊の中間地点にある「一の沢」というところで、全員、野原に毛布2枚被って寝た。朝になったら朝露がドブブリ。朝になって分かったのは目の前がすぐ海で、その辺りの集落としては小泊とか大沢と云うところであった。誰かが枯れ木を捨てて飯盒で飯を炊いていたら、ロスケが全員集合でみんなを1箇所に集めて数を数えた。「なんだ、なんだ」と誰云うともなしに。誰かが「10名位、夜、海岸を伝って逃亡したんだって」と、どうしたんだかなあ。朝メシは途中半端のメッコ飯（生煮えで芯があるご飯）、それを食べて又出発。

## 大泊での作業

大泊に着いたのは夕方近く。高いところの小学校に移り、又陸軍病院だったが名ばかりで、病院の勤務は無かった。次の日から作業が始まり、港に行つて引揚者の後始末。大きな倉庫に何処から持って来たのか行李、布団その他色々山程。倉庫の片隅に便所。大便が山。外に出られなかったんだな。その片付け。クサイ、クサイ。又、次の日は行軍して2時間位の所かな、飛行場の真ん中を通り、飛行機全部覆い被って何機も並んでいた。

小さい部落に入って仕事は冬の支度。土台の所に土盛って風が入らないようにする仕事。帰りにロスケの将校からスープのガンガン（一斗缶のような大きな缶）入れを「ヤボスケ（日本人）飲めっ」て貰った。うまかつ

たなあー、皆んな「いつ北海道に帰るのよ」と云った。

### 船で沿海州へ

9月末頃、いよいよ北海道に帰る日が来た。夕方、全員で200名か300名位かな、船に乗った。船は油槽船で5000トン位、甲板に室を作ったもんだな。船の上は太い油のパイプが何十本もあった。みんな帰れるんだと喜んで、そしたら2時間位走ったかな、枕を起こして、もう北海道に着いたのかなと思ったら、外は真っ暗闇。所々に灯が見えるだけ。みんな「変だな変だなー」と。朝になったら西能登呂岬に泊まったんだ。

みんなが、夜の航海は機雷があるから、航海はしないとか。それから能取の岬回ったと思ったら少し走ったんだが、小さい島が見えて来た。「あれなんだ、どこの島だ」と話していたら、25歳位の人が、「潮が行っているからトド島（樺太の西にある海馬島）回って行くんだ」と云ったので、俺も20歳過ぎていたから変だなと思った。そのうちに船はどんどん島が小さくなるまで走ったね。「オーイまだ北海道に着かないのかオーイどうなったのかー」船の中は大騒ぎになったな。そしたら誰かが「ロスケに連れて行かれるんだ」と云い出した。そしたらみんな死んだ人みたいにものを云う人も無くなった。

「捕虜だ捕虜だ」とみんな叫んで、泣いた人もあったな。何時間か分からないけれども朝になってもさあどこか分からない。誰かが「ロスケの沿海州だ」と叫んだ。丁度ホマワンド（利尻町神磯地区のゆるやかなカーブを描く海岸部の通称で、現在は「霊峰湧水」の場所として知られる）みたいな広い所で、家の白い塀が所々に見えた。それから船は北上したんだ。夜は機雷が危険だから昼だけ走って3日間。船上では、ロスケの兵隊が黒いパンを齧り、ブタの白身の塩漬けを齧っていたなあ。俺も少し食べたけれども、塩っぱかった。船上では、パンの黒いやつは酸っぱくて食べられなかった。だが、大泊から出る前に誰云うとも無く、米炒って軍足の中に3本位入れてあった。いつどんなとき来ても米食べてれば死なないと思ひ、炒り米用意して置いたものな。それを船上で食べて水飲んでいたものなあー。

### 最初の収容所と南京虫

次の日、夜は走らずに3日目かに小さな港（後年、

ソフガワニと判明）に着いた。見たらもう兵隊が働いてたな。「どこから来たのか」と聞いたら「北千島から」とのこと。ロスケの兵隊に連れて行かれたのは大きな建物（ラーゲル）宿舎。その棟が7つ位。1棟に60名位入れる。その晩ローソクの灯より無い夜、足が痒くて、みんな起きて痒い痒いと云った。南京虫が寝台の柱の割れ目にウヨウヨ。初めて見た。潰すと油臭いにおいがしていた。シラカバの皮燃やして焼くのだ。臭い臭い。とても眠れないから戸口に行つて寝た。10月2日夜、朝露が降りて、毛布にどつぶり。足首掻いて掻いて、赤く腫れて痒くて痒くて、それから屋根の上土の土間に上がり2晩寝たな。さらに、体が痒い痒いと思ったら、着類全部シラミで、兵隊全員がシラミだらけ。服の襟の中まで卵産み付けて、なんぼ潰してもだめ。人間も何十日（1ヶ月）も風呂に入らないとシラミ湧くもんだね。そしたらロスケの兵隊が来て、順番に裸にして衣類全部を殺菌消毒。ドラム缶2本繫いで木を燃やし、その内に全部衣類を入れてシラミを殺す。そのうちに火事になって俺真っ裸。ヤーヤ大変大変。着るものが何1つ無かったからロスケに云って、3日目位だったか、各兵隊が出したのか着る物は何か出来たな。

### 海岸埋立作業と花屋

いよいよ作業。トロッコで海岸を埋め立てる仕事。ホマ場所より倍位の土手の下を掘って土の運び屋。11月も近くなると-25～30℃位になる日も多くなった。土手の途中の中央に大きな石が飛び出ている、シバレ（厳しい寒さ）が緩めばいつ落ちてくるか、危ないから気を付けた方がいいなと云っていた。日本国中から来ている兵隊だから、仕事の方はさっぱりだ。俺は20歳だったけれどもみんな俺の云うことを聞いたよ。その内に暖かい日が2～3日続いた。そしたら案の定その石が落ちて、俺の宿舎の兵隊1人亡くなった。どこの人だかその時は分からない。次の晩通夜があつて死花が上がっていた。花屋さんも居たんだな。

話は帰還後の1953（昭和28）年になるが、神磯の秋元勇太郎（武田の母さんの親）が、12月30日の夜、磯舟揚げに行つて波にさらわれたと、部落会長の辻七郎さんが朝早く知らせに来た。起きて見たら昔の道路まで波が上がって、道路はジャブジャブ。俺

達は29日の番は消防の防火で夜回り。帰ったら気圧計の針が980ミリバール(かつての気圧の単位、1mb=1hPa)。「やあ、ひどいなあ」とみんなで道路の上まで磯舟揚げたんだ。その時の時化で流された磯舟が、藤井幸二郎の横まで流されて壊れていたな。次の日の朝、隣原田に遊びに行ったら、秋元の葬式に来て居た花屋さん(原田と樺太で同じ部落だった長内さん)がいて、原田の親父に「お前の子か」と聞いたら、「隣の息子よ」との返事。「どこかで見たことがあるなあ」まさか8年も経っているのに「シベリアばけ」でもあるまいに、どこかで見た様な顔だなあ・・と。その内に、その花屋に「ロスケに行っていなかったか?俺は沿海州のソフガワニと云う所に油槽船で着いたが、港の上の方の第一ラゲルよ」と云ったら、その花屋が「ヤー、その時、石が落ちて1人死んで、ラゲルで死花を作ったの、俺だ」と。人生いつどこで再会するものか、懐かしかったなあ。その頃を思い出して何時間も話し込んだなあ。「なあ、何故俺の事思い出した」と聞いたら、「上等兵を殴った人だもの分かるよなあ」と云う。当時一等兵の襟章を取ってしまっていたが、上等兵や伍長ら偉い奴らは戦争終わったのに付けたままだった。初年兵はみんな文句を云ってたよ。朝昼晩、現場でスープ少々に黒パン1個で終わり。夜は寝台の上の方に上等兵等偉い兵隊ばかり、下の寒い所にいるのは初年兵だけ。上から切ったパンの中の美味い所をとって縁の硬いところを下の俺たちに渡す。初年兵はみんな文句を云っていたが、誰もなにしようともしない。今までの軍隊の頭がとれなかったんだなあ。俺の上段に居たのは陸軍病院当時の衛生上等兵で、生意気な奴。軍隊時代、俺に往復ビンタ食らわして口の中切れた。廊下の通りの室から薬出すのに錠をはずして居たら、そこを通りかかって、敬礼をしないとほっぺ叩かれたもんだ。後ろ向いてたから誰が来たか分からなかったし、いつもその頭があったから、パンを俺に伸べて寄越したその手を思いっきり引っ張って下まで落としたり。鼻血出るやら眼鏡割るやら大騒ぎ。下に居た初年兵みんなが、「吉田やってやれ、やってやれ」と大声をあげた。偉い奴等は誰も止めようとしな。その時にひとり止めに入ったのが部屋長(伍長)で、目の前に居る花屋さんだった。それで俺の顔忘れなかったん

だな。その時のことを思い出すと、やはり若かったんだな。初年兵の正義の味方かなあ。この花屋さん、その後稚内に行って葬儀屋に勤めてた。

夜になると、誰が何云うでもなく、騒ぐこともない。1日1日寒くなるにつれて、早く日本に帰りたい、来年の春にはきつと帰れるべとみんな思っていたんでないか。何日目か、船が着いた棧橋の附近の海を埋め陸地を広げる作業があった。何百人もの仕事だから土砂をどんどん埋めて、見る見るうちに広場が大きくなった。その棧橋の作業で、ケーソン(防波堤などの構造物設置のため水中に設置される箱状のもの)がひとつも無いところに、丸太を組んで石を入れて埋めてケーソンにした。港のそこに3000トン級の船が横付けになるのだ。丁度河口の港だ。河の沖の方にガンビのボンデンがあったから、何か網でも入れてあったのかなあ。陸からケーソン50~60m位かな、河口だから深かったんだ。良く丸太組んでやったもんだ。みんな昔は囚人がやったみたいだ。その作業に行った時、誰かが港で魚釣って居たとか、ロスケが鰯食べないとか、色々話があった。なにせ毎日食べる話ばかり。魚釣るたって針ひとつ無いし餌もない。けれどもやっぱり頭だなあ。港だからそこらにロープの切れ端がいっぱい投げであつた。それを繋いで繋いで長くして、針は燃やした木から釘が出る。その3寸5分を曲げて針にして、昼に食べるおかずの鰯の塩蔵したの1匹、それを餌に。針にアゲが無いからすぐとれる。麻(ロープ)で落ちないように結んで崎に行って石の錘を付けて垂らした。河口だから流れが速くそのまま昼まで置いた。昼になってみんな鰯を焼いている。俺は釣れてるか先に見に行った。引っ張ったが何も付いていなかった。1尋位上げたかなあ。そしたら急に引くや引くや。大変だ、鰯だと思ったので大声で叫んだ。何人かが走って来た。足がぶるぶる震えた。ひとりが丸太に掴まり、ひとりが腰のバンド持って、ひとりが上の丸太に掴まって俺を支える。鰯が浮いて来たが、アゲの無い釘の針だからはずれたら逃げられると、やあやあどうやって上げたか今も記憶に無い。2人して担いだら尻尾が地面まで着いた。早速真っ白に塩して置いて、次の日4人分、1切れ少々三平にして食べた。何日食べたべ。12月に入り海は真っ白に凍って河口をダンプが走ってた。白い水蒸気が上がってたから-30℃位あったの

かなあ。最初は吃驚した。河の中を車が走るのだから、風呂は薪を沢山燃やして部屋を暖めて居るから寒くはない。お湯は木の桶に2杯。1杯で体温めて垢擦って、1杯で流すんだ。12月も暮になりみんな正月の話ばかり。寒かったなあ。それでも正月は2〜3日休みだったと思う。正月の5日頃急に移動があり、そこで同年兵みんなと別れ別れになったんだ。

## 1946（昭和21）年

### 駅拡張工事にかかる夜間穴掘り作業

汽車で2日位かなあ。着いたら同じような宿舎。同じ建物が8つ位あった。1棟に50名入ったと思う。駅を拡張する工事だ。夏はツンドラで水湧いて出来ないので、冬のうちに穴掘ってダイナマイトで爆破する作業だ。昼夜交替で60名以上の兵隊が働いた。穴は1m×2m以上。中はシバラてカンカン。梘子（てこ）で穴掘るのは晩の8時から朝の6時まで。ロシアの方は夜明けが早いな。5時したら明るくなるんだ。−30℃から32℃位で寒い寒い。なんぼ20歳と云っても大変だった。夜間作業に出るとき、腹に毛布1枚巻いてその上に冬物、その上に外套着て、歩くのもようやく穴に入って、寒いから足踏みだけ。

1人1穴だからなんぼ掘ると云うことも無いので、梘子で10cm位掘って唯足踏みだけ。梘子が相手なのでロスケの手袋は親指のところからすぐ切れる。冷やっこい冷やっこい。母がテッカイシ（冬用の手袋で、防水性などが高く様々な作業に使われた）作って居たのを思い出して、病院から持って来た綿が有ったので古い革靴の横の革を掌に加工、革は釘で穴を開けて2日掛かりで糸で縫ったが、どんな糸を使ったのか思い出せない。梘子を持つと指が開かないので、手の親指を広げて型を取ってやったら今度は上手く行った。何ぼ梘子作業しても掌は革だから切れることもなく大成功。やはり親の仕事は見ておくもんだとつくづく思った。今の子供達は親の仕事見てないから、時代でも変わったらどうするんだべ。何百もの穴掘り何ヶ月も経って終わった。いよいよダイナマイト。1箇所数十本（50本とも70本とも）聞いた。そして発破する日が来た。口火に火を点けて順番に爆破する。始まるや宿舎は地震が起

きた様だった。飛んだ土は全部シバラ土。その量は何ヶ月も穴掘りに日数を掛けたもの。中には1晩3回梘子付いて朝まで足踏みしていた兵隊も居たと話していた。少しくらいの量ではない。見渡す限りの土の山。駅の拡張だものな。その土の運搬。4トン車に6人1組で30台。1日のノルマである。上に2人上がって、土がシバラしているから中に穴開けて巧く積んだ。台数だけだから。日本人は頭いいなあと思った。兵隊は日本中からで、様々な人が居たものなあ。出来るものなら完成した駅舎を見たいもんだね。

拡張工事の後は、1〜3月に港から近い所と思われる場所で、他の作業もあつたけど毎日土投げをしていたよ。

### 馬と芋

春頃かなあ。丸太出す作業をする馬が死んだのは知っていたが、ロスケは食べない。穴掘って埋めてしまふ。それを日本兵が見付けて、夜行って穴掘り返し、少し臭う肉だが取って来る。俺達も2人して夜行ったな。暗闇の中土掘って、どこか分からないが取って来て、洗って塩して食べた。美味かったなあ。移動の度に段々と奥の方に入って来たなあという感じだった。

3月頃になると、シバラるけれども雪はそんなに無いから、日が照れば少し解ける。そうすると、去年倉庫に入れるのに貨車から運ぶ際に落とした芋が、レールの中からシバラて出て来る。秋に掘って拾い残した畠の芋が、春に出てくるのと同じで、毎日空き缶に弦付けて腰に2つぶら下げて拾った。1つの缶に芋を入れひとつを蓋にして火にくべるとぶうっと焼ける。その芋の美味しいの、美味しいの。羊羹でも食べる様だった。終いに夕方暗くなると芋だか、馬糞だかシバラて分からない。缶に入れて火の中に入れる。なんだか臭いなと云ったら、芋と馬糞と一緒に焼いて、大笑いした。

### 大工と伐採

7月に又移動。同年兵とは別れ別れで知らない人ばかり。作業はアパートを建てる作業。5寸角、3寸角、30m平物、床は厚さ5cm、巾50cm、2間物。2階の床は水漏れが無い様にするため、船大工が使う目の細かい「通し鋸」を使って床板を切り、船の床を作るがごとく隙間が全くない床を作ったものだ。



5寸角組んでアパートを建てるのは初めて。兵隊の中には大工さんも居たんだ。巧いもんだ。俺達は運び屋。ユニックも何も無い頃で、足場架けてロープで揚げて2階建て1棟作ったんだ。その時初めてロスケのマナー貰った。捕虜に金払うなんてと思っていたら1棟の金額が決まって居たんだ。日本人は頭いいんだから予算より安く早く済んだそう。その時幾ら貰ったのか記憶が無いが、「ヤポンスケ（日本人）ハラショウ（大変素晴らしい）」と誉められた。夏は大工の手伝い、冬は伐採。雪は少ないが、さすがに沿海州なので気温は-25～30℃位。この作業は翌年の春ぐらゐまで続いた。

### 十勝の人

秋頃のこと。向いの寝台に寝ている人が、夕方、腹が病んで大声で痛い痛いと呼んで居た。その場に行ってみたら、目も顔も真っ黄色。何したんだと聞いたら、腹減ってアオイモ食べ過ぎた様で、朝になったら「静かになったなあー」と思って見たら、白い布掛けてあった。死んだと。なんだか十勝方面の人だとか。体格の良い、俺より4つ位多い27～28歳の人だった。近くに大きいロスケの病院が有って、その近くの宿舎に俺達が居た。その病院の医者と日本人の軍医が何回か室に来て診ていたことがあったが、手遅れだったのか、入院はさせなかったな。作業に出て帰ったら、最初、どこに連れて行ったのか分からなかったが、1週間位解剖室に置かれていたもんだなあ。その後俺達2人が解剖室の火焚きに回された。10月末頃だから寒くなって居た。入ったら大きな台に白い布を被った遺体があった。布を取って見るとあの芋を食べて死んだ十勝の兵隊で、その傍にもうひとつ白い衣を被った遺体があった。その布を取って見たら顔は容貌が分からないほどに鼻も落ちて無く、腸も大分出た遺体で驚いた。何日か前に鉄道事故で亡くなったロスケの人だった。十勝の兵隊の軍医（日本人）とロスケの軍医による合同の解剖のため、室を暖めるのに薪くべて待っていたら、軍医が来て遺体の腹を胸まで切り開いて中を取り出し、何か喋っていたが、縫い終って帰った。その後兵隊の遺骸を近くの墓地に埋めた。2人して棺をどうして運んだか記憶が無い。冬の内に何十個と穴を掘って置くので、半分位水溜まっていたな。その穴に土被せて十勝

の兵隊と書いた十字架立てて来たが、その後どうなったか、名前は分からず終いだった。解剖室に入って、死人の側で火燃やしていても、なんにも怖くなかったなあ。頭が変になっていたんだ。きつと・・・

### 腕時計

沿海州に行ってから1年が過ぎ、その内に皆ロスケに腕時計を取られたとの話が広まっていたが、俺はまだ持っていた。検査されても分からない様に、服の脇下に縫い付けて於いた。時計を手放すのは、いよいよの時が来たらロスケと物々交換するつもりで、こんな処で死んでも、誰にも線香1本上げて貰えないなといつも思っていた。夕方宿舎に入ると、まず先にそこら辺の草を採って外で茹でて、固く握って隠し、食堂に持って行ってスープ1杯にして食べるんだ。腹減って、腹減って・・・

### 風邪でも作業

昭和21年10月頃、作業に行ったら雨降りて濡れて、それが元で風邪ひいて38～39℃の熱出して、誰か分からないけど朝までタオルで頭冷やしてくれた向かいの人。山形県の人で、その時25～26かなあ。伍長位かなあ。その後、俺は肺炎を起こした様だった。咳も出てたが、休む事なく作業に行った。その内、看病してくれた「山形の人」が何処に行ったのか分からなくなってしまった。移動する度に「だんだん遠くの方に行っているなあー」と思ってたが、今でも名前を思い出せない。

### 佐野棟伍長、山村との出会い

冬の伐採作業は、鋸1mくらいを使って2人で挽く。そこで佐野棟伍長（姫路）と会ったんだ。佐野棟伍長は上官であったが、仕事はさっぱりで、毎日俺に怒られて、冬の寒期中、春まで木を切ったよ。

冬はなんにも食べる物もないが、農家出の人が居て、トドマツの末の方の薄皮剥いで焼いて食べたり、その皮の甘皮採って木の根っ子の上で銭の頭で潰し、コウリヤン（高粱、イネ科の穀物）メシの中に入れて量を多くして食べたり、「農家の人達は凶作の時どんな物食べたのかなあ」と思ったな。漁師はだめ。魚獲るしか芸がないものな。コウリヤンメシは良い方。小豆を朝昼夕と3食。6日あまり続いたら山に行く時脚が上がらな

かった。大変だった。

4月になれば又大変。マツを切り倒して丸太にするために、倒したマツの枝を鉞で落としていく作業があるが、葉がついたままの枝であればその重みで楽に枝落としができた。落とした枝は別の場所に集めて燃やすことになっていたが、枝落としの作業が遅れている人たちもいて、その現場にその火が伝わると、枝落とし前のマツの葉が全部燃てしまうこともあった。すると、小さな鉞では枝が落ちにくく、なおかつ全身ススだらけになってしまうのだった。そのため、昼飯を後回しにして早く3立米以上のノルマをこなすんだ。1本の木から6mが1本、4mが3本、2～3mが1本、の材木を取ることができる。立っている木は長くて長くて、ずうっと天辺しか枝が無いんだ。

佐野棟伍長とは作業が同じで2人1組だが、寝る所が離れていたなあ。俺の横に山村と云う人が満州から来て居た。どうして満州から来たのか聞いたら、八戸から18歳の時に満州に義勇軍として来たんだと。それから色々と話して兄弟になった。やつは、農家の出だから馬の方はお手の物、俺なんか馬はおっかなかったなあ。伐採した木を馬で挽きだす役は山村、俺は切り役。毎日腹減るし、食べる物は木の皮、雪を飯盒に1杯沸かし塩入れてスープ。薄めて全部飲むんだ。飯盒1つの水を鍋にしたら丁度5人分位のおつゆの量。便は固くてウサギの糞の様にコロコロ。

冬の作業で思い出すことがある。伐採している時、佐野棟伍長と2人で、大きな松の木を倒す方向にガンビの木が有り、その木に倒れて行って、ガンビは折れなかったが伐った木が上になり、根っ子が飛んで来て手と胸の処を掠った。吃驚した。その時頭にも当たっていたら今頃は居ない。帰ってバンドに付けたお守りを見たら、2つに割れていた。いつ割れたか分からないけど。

## 1947 (昭和 22) 年

### 山村との別れ

だんだんと4月が5月となり、さすがのシベリアも春の芽生えだ。木の芽も少しづつ膨らみだす。喉渴いたらガンビの木に傷付けて、その下に飯盒置いて数時間すると一杯になっている。美味かったなあ、砂糖水より

まだ美味かったなあ。山村は馬の餌の燕麦を焼いて持って来てくれた。俺の方は赤松の実焼いたのをやる。秋になると赤松の実が小指位になり、中に白い白い大きな実が入る。まだ小さいのだが食べる物が無いので赤松伐って、それを焼いてヤニ採って実だけ山村にやる訳。そればかり食べているので糞は真っ白カンカン。その内に山村と固い約束をした。「お前が生きて帰ったら俺の親に手紙でもなんでも良いから知らせてやってくれや」と、そして寝ながらお互いの住所を頭に入れたものな。帰りには書いたものは何一つ持って行けないとか、帰る話ばかり。数ヶ月俺は木伐り、山村は馬で運搬していたが、その内作業が変わり、「山村はどの仕事に行つたんだべなあ」と思っていたら、晩になつても帰って来ない。「どうしたんだべなあ」と聞いたら、ワイヤーで2寸5分位の釘作るために、鉞の刃を上に向けてその上にワイヤーを置いて切っていたら、切った釘が飛んで目に刺さって入院したと・。それで山村とは別れた。

### 脱走

中川原(仙法志)父さんの弟が、樺太の時代、上敷香の憲兵の軍曹で偉い方であった。笠井と云う名だ。憲兵と云えば大したもんだ。樺太病院時代に石垣鉄見(長浜出身)と2人して休みの日に憲兵の宿舎に行つたよ。行つたら、汁粉、どんぐりパイ食べたが、美味かったのか美味く無かったのか、一等兵の俺達、どうやって食べたか今でも思い出せない。憲兵は警察、特務機関。この人達は兵隊と別宿舎で、食べることも別々の軍隊の最高幹部で、抑留後は兵隊よりも帰国が遅れると云う話だった。

ある時、その笠井さんだが、そう云う事があつたのか俺の顔をよく覚えていたんだな。線路の作業で10メートル位離れたところで出会い、「吉田、今頃鯨場だなあ」と、4月中旬だもの「そうだなあ」と云つたら、ロスケの兵隊来て「ダワイ、ダワイ(ダメだ、ダメだ)」と云ってレールの上に立って笠井さんを追払つた。その時、「何か話したい事があつたのかなあ」と後で思った。同じ宿舎の中でもあの人達は別。戦争終つて2年の春だもの、樺太から持って来た食糧もなんか持っていたのかなあ。次の日は日曜日、みんな休んで居たら全員集合。何したんだ、何したんだと集まつた。そしたら

5名脱走。笠井さん始め、軍曹、伍長などの偉い奴、夕べ脱走したんだってと人数確認。ロスケの将校大声で、「ヤポンスケ（日本人）帰る時が来たら全員帰す。脱走は刑務所行きだから逃げるな」と云った。次の日から作業休み。宿舎の周りの草むしり。誰かが逃げても足跡が付くようにと2日間、きれいになったなあ。「脱走したみんな、うまく逃げられるといいがなあー」と思っていた。何日目かなあ、捕まった5名が玄関前に並び、軍用犬に咬まれたて服はボロボロ、顔は傷だらけ、見る影もなかったなあ。

### 鉄道補修とレンガ作業

その内作業が変わって鉄道補修。中が2m位あったかな。汽車は薪木を焚いて走っていた。汽車の後ろを見ると船が走っているみたい。それを沿海州からコンサモスクまでのなんぼあるんだべ…。その間、捕虜になった日本人、ドイツ人は山の伐採や鉄道、レンガ工場、石切場、住宅建設など、なんでもやったな。そうしているうちに佐野棟伍長とも別れた。

次の作業がレンガの住宅建てとレンガ作り。機械から出てくるまだつながったままのレンガを切れば、普通のレンガの大きさ3個か4個になるんだ。それを一輪車で運んで柵に並べて幾日か干し、干し終わったら今度は窯に入れ薪を燃やして焼く。何日位置いたのかな、窯から出す時、煙で煙で何も見えないのと、熱いのもう大変。そのレンガで住宅建てていたが、レンガ運びは3階ともなれば運ぶのは大変。最初は手で何枚かずつ運んだが、段々高くなって3階へは5メートル位の梯子を作った。それでも手で持って行くのは大変。それで思っていたのは学校時代。帰りに見ていたのは天塩から薪を積んで来る帆前船。丁度政泊の種田の潤に入って薪を船から運ぶのを見ていた。ショイマ（背負馬）、ショイコ（背負子）だ、それに下の方に1本ずつ棒をやれば背中では15枚から18枚位運べるさ。それも1日百枚位運ぶノルマがあって、俺がそれを作って使ったらみんな真似してなあ。ロスケは「ハラショウ（上等上等）日本人頭が良い」と。見て居た事はいつか役に立つもんだ。山村と別れ、佐野棟伍長とも別れ、同年兵とも別れ、知らない人達ばかりと働いていたなあ。

### マムシを食べる

作業が変わって、今度は石切山に行つて石を下に落とす作業。30～40m位高い石山の上から手で持てる石を投げるんだ。巾3m位で40～50cmの丸太を組んでその上に石を投げれば下まで飛んで行くんだ。石を集めているうちに蛇の殻が沢山出て来た。みんな、おい蛇居るんでないかと云っていたが、昼休みにロスケの兵隊が5～6匹持って来た。初めてマムシを焼いて食べたが、最初は身欠鯨の様な味がしたな。どの位食べたのか。作るのは農家の人が上手。上あごと下あごを持って、割けば臓物と肉の方と別々になるんだ。臓物は飯金の蓋で炒れば脂が大した出る。その脂を南京虫にやられて膿が出ている上に塗って2日もすると綺麗に治ったなー。栄養失調で、食堂までの30m位を連れて行ってもらっていた人に、マムシの目を生で何回か飲ましたら、ひとりで行く様になった。農家の人は大したもんだ。夜間作業では、その石を貨車に積む作業。落としたり足に怪我をする。朝までその仕事。数十人と兵隊の作業だから作業そのものは大したことはないが、朝まで石を積んだ貨車が並ぶ。石を1つ1つ貨車の中に投げる。今思い出しても良くやったもんだ。その石をレールの下に敷いて線路を修理するんだ。

### 製材所

秋になり、また移動。その作業は製材所。毎日土場から丸太上げ。10人位で長さ4m位の丸太を挽く所まで揚げる作業。丸太山程有るんだ。4m、6mの丸太に4名か6名かなあー。上まで揚げるのに手を緩めたら自分達の所まで落ちてくるので大変。昼夜通して角にしていた。5寸角と板とボイラー重機で鋸歯4枚か6枚かなあ。一ぺんに平物最初に4ツ位、それを又レールで元に戻して今度角に引くの。

その内に夜勤が回って来た寒い夜、シバレて吐く息も白く、苦しく感じた。3時間位したら一時休み、小さい小屋でローソクの灯だけ、火は燃やしてたなあ。部屋に入ると暑く、みんな何もしゃべらないで居眠り。腹は減って来るし外は寒い。12時頃かなあ、ロシヤの将校が馬で来て、作業止めるようにと。帰って寒暖計見たら-42℃。風ひとつない夜。寒さより体が痺れる位。鼻も耳もみんなシバレて春になったら皮剥けて来て、お

互いの顔見てヤヤーッて。

### 山村との再会

コムソリスクと云う市街近くに来たようだった。丁度その日は日曜日で、外出許可が出て、釣りに行くべと2時間位歩いたかな。アムール川と思われる大きな川に出た。向こう岸が利尻から見る礼文より遠いかな。海かと思った。流れは少し早かったなあ。連絡船が汽車も積んで向かいに行く。船は水蒸気で水車で走る。初めて見たなあ、大きな連絡船。今思えば500トン位の船かなあ。その河で魚釣ってた。何釣れるものか。泥水のような河。なんでも流れて来たなあ。昼になった。4人位か。俺なんかロスケの金を少し持っていたので、レストランに行った。このお金、実はちょうどその頃の建設作業で、日本の作業員のおかげで早く安く建設できたことがあり、社会主義の国でもあったためか、作業にたずさわった我々日本人全員に支給されたものだった。白いパンに鮭の頭のスープ、青菜1枚入って、良い匂いしてたなあ。美味かったなあ、4ルーブル。4ルーブルと云うと、2kgのパン1個買えた(パンは2kgと4kgがあった)。3日間食べられるだけのパンだ。食堂を出たら、駅に帰還する兵隊が汽車から降りて体操をしていた。やあ、あいつら帰れるんだなあ、喜んで体操している。20m位離れたその帰還兵たちの中に、あの山村が居る。山村もすぐ分かったようで、近く寄って話をと線路1歩跨いだら、ロスケの兵隊に「だめ、だめ」と阻止されたが、それで山村が帰還できたことが分かった。山村は俺の住所を頭に入れてくれていたから、俺が元気で居ることを親の所に手紙出してくれると思ってひと安心したが、その夜は一晚中眠られなかった。また秋が来て、あの寒い冬が来ると思うと・・・

秋も過ぎ、ダモイ(ДОМОЙ ロシア語で"帰る")の話も無くなり、誰もが食べることだけ。現場に行くのに、前後にロスケの兵が1人ずつ付いたが、誰かが道路の草取ってポケットに入れると、また次の兵隊、また次の兵隊も。現場に着くのに数時間掛かったなあ。工事は道路の側溝の修理。水が流れる様にする。そしたら蛙が出て来るんだ。日本の蛙よりも大きい。さあー、出てくると誰も仕事をしない。飛んで、跳ねる蛙を掴むのに大変。ロスケの兵隊が、仕事をやれッと云っても

誰もが銘々蛙掴むのに一生懸命。捕った蛙は2本の脚だけ皮剥いて、木の根株の上に数時間乾して置く。松の根株の皮のところに白い芋虫の様な虫が入っている。それを飯盒の蓋で炒れば油が出るんだ。その油付けて焼く蛙はウマカッター。

### 冬のラーゲル

寒い夜は-38~-39°C位あったなあ。小便したくて便所に行き空見たら、星がキラキラ。あんな星は見たことない。今でも陰の中に見えている。その時星見て帰りたいと泣いたものなあ。その数日後、どこか悪いと入院だから、病院の人先に帰れるんだ、と話が広まり、その晩、お湯を沸かして足で蹴って火傷したら入院になるし、と思って、沸かした湯を足で蹴飛ばしたがヤケドまで行かず、入院どころか一晚中足の甲がヒリヒリ痛んだ。

-42°Cでも小便は凍らない。凍るのは嘘。タオルは5秒位でカチンカチンだ。宿舎に帰れば誰もなんも云わず、唯いつ帰れるのか、どうしているべ、腹減った、腹減ったで眠った。便所は宿舎から20m位離れていて、小便しに起きたら寒い寒い。でも部屋は朝までドラム缶のストーブだ。2本分の長い薪でも入る。1室60名居たべなあ。大便是凍って上まで来て、腰下ろすと便が尻に当る。昼間誰かが梃子で突いて低くしていた。そうしないと段々山になるんだ。

その宿舎は、ネズミが多く出て、昔の人はよく云ったもんだが、ネズミの金縛り。寝てたら初めて味わった。足元から上がって来たのは分かっていたが、体が動かない。その内に俺の鼻齧ったので吃驚して目が醒めた。初めの終わりだね。1人の兵隊が火の番をしていて、出て来たネズミ叩き殺して焼いて食べてた。その匂いが良くて、食べたくて、食べたくても、なんか病気でも持っていたらと思ひ、ネズミだけは食べなかったなあ。その匂い、今でも思い出す。毎日毎日考える事は食べることばっかし。鉄道作業に行けば丸い石見れば、この位のボタ餅なんぼ食べれる?とか、仕事より食べる事。石が餅に見えたりマンジュウに見えたり、毎日そればかり。

### 1948(昭和23)年

#### 岩塩スープ

冬が去り、春の匂いがする季節になり、草木も新しい芽を出して色づき、日増しに青くなって来た。兵隊達はその青い芽を歩きながら窶ってポケットにいっぱい詰め込んだ。食べられなかったのはガンビの若芽。渋い、渋い。あとのものは全部食べた。なにせ飯盆1杯食べたいので、馬が食べる黒い塩（岩塩）を入れて量を多くして、山菜スープにするんだ。春になると、みんながんばれ一ってな。このスープ、2ヶ月も飲むとみんな塩分のせいで顔がぼんぼんに膨れてしまった。

### 脱走の顛末

笠井さんと脱走した例の5人組の1人、佐藤伍長が俺の班に入って来たんだ。やあ一吃驚した。佐藤伍長が云うには、逃亡3日目に沢の水を飲んだらしく、誰かが腸チフスになった様で、それで火を燃やして米を炊いた所にロスケの兵隊が来て、軍用犬に咬まれて5名全員が手を挙げたと。それから逃亡したことで軍人裁判に掛けられ、一人一人別々にされたということだ。脱走の顛末の話をして初めて聞き、笠井さんもどこの宿舎に飛ばされたという話も聞いた。佐藤伍長は、「俺はみんなと一緒に帰れない人間だ」「あと6～7年位はだめだなあ」と云っていた。俺の隊の中に警察あがり1人居て、それもみんなと一緒に帰れないんだと、いつも云っていたなあ。

### 墓の入れ替え作業

夏頃、7名位の出張があり。場所は河のすぐ近くの宿舎で、誰も兵隊が居ない（後日、この場所はウシイカオロチスカヤではないかと想像している）。全部空き室ばかり。病院も空き室。大きな糧秣倉庫があったからかなりの兵隊が居たんだ。作業は墓の入れ替え。日本の兵隊のものとロスケの人のとを別々にする作業、墓の掘替えに1日4体。木棺を穴からあげて外に移動する。水がいっぱい。ロープ下に敷いて6人してあげるんだ。ロスケはロスケの墓地、日本人は日本人の墓地に整理するんだ。1日に4体だから早く終るが、日本人だけで50体ぐらいあった。臭くて、なんか体に付いているみたい。みんな風呂に入って、その後は何にも無し。その内誰かがその大きな倉庫に入って、床の板バりで剥がしたんだ。そしたら床の下に麦が山程有っ

た。みんなあちこち床起こし。燕麦、麦、コーリヤンなどなど。その内誰かが挽き臼を見つけた。50cm位の木の桶に粘土を詰めて石の挽き臼みたいに作ったのがあった。みんな大騒ぎ。木の板を巾5m位にして粘土の中に埋め込み石臼の様にする。後は石臼のように挽けば良い。粉を取って粉を練りドウナツに揚げたのは美味かったなあ。その時みんな何か唄ったな。残った物は釣瓶井戸に吊るす。夏でも10m位の井戸でも真ん中は凍っていたよ。その作業に1ヶ月位かなあ。墓の入替作業終了後、出たら同じ所でない変わった宿舎に入った。河の近くだと思う。その頃の宿舎は日本中の兵隊が集まっていたな。俺達の同年兵は誰も居ない。段々痩せて来るし、「このままでは体もたないなあー」と思った。こんなところで死ねない。どんなことがあっても日本の土を踏んでから死にたいと思っただ。

### 時計と黒パン

時計が最後の頼み。服の腋の下に縫いつけて於いた時計を取り出して、知らない兵隊、大阪の人の様、飛行機の整備の兵隊に黒パンと交換してもらった。相手も大阪の商人、時計1個で2kgのパンを2つより寄越さない。でも「仕方ないなあ」と思って隣と上の兵隊4人で分けて、1個はパンを枕にして寝るのに残した。それが捕虜の夢だった。パン1個枕にして寝てみたなあ。・・・いつもみんなが云って居た。時計は、出征する前の年、祖父である朝治の何年忌だかに、小樽の叔父叔母が出征祝いにと買って来てくれたもの。祖父の33年忌の時は仏壇を買ってくれて、平成22年頃まで有った。その時一緒に、掛け軸も貰った。「虎は子を一人前にするために谷に落とし、上がってきた子だけに餌を与えて育てるんだ。この掛け軸は親が子供を口に啜えている。親の子供に対する愛情の図だ」と、今でも家にある。時計は日本に帰ったら買えば良い。生きるためにパンと交換した。パンを枕にして一晩寝たなあ。次の日も大事にして食べないまま、夜9時頃小便に行ったら、誰かにパン盗まれてしまっていた。誰か分からない。どこで見ていたのか、残念で泣いたなあ。

### 1949（昭和24）年

## ライチハへ

2～3月頃だったろうか、ハバロフスクでレンガ工場  
で働いたり、鉄道工事などいろいろなことをやったが、  
次は河を渡ってハバロフスク近くを過ぎ、4日間汽車に  
乗って着いた満州境界近くの露天掘り炭鉱の街、ライ  
チハだった。入ったら玄関の中でラッパ、10名位の音  
楽隊に吃驚した。「同じ捕虜でもこんなに違うんだなあ」  
と思った。食堂に夕飯食べに入ったらまた驚いた。兵  
隊が居た。みんな太って太って顔がまん丸。驚いた  
なあ。俺なんか痩せて痩せて、よく見ると他に外食する  
食堂も有り、日本と同じく銘々が注文する、好きな物を  
金出して食べる。「こんな処もあるんだなあー」と思っ  
た。その宿舎に千人位の兵隊。東と西の2つの出入口  
を使うのだが、知った人にも、同年兵にも会わない。  
知らない人ばかり。

## 選挙で選ばれる

石炭の露天掘りのところに行った当時、選挙が流行っ  
て来て、小隊長は15名の中から選ぶことになった。  
今まで小隊長と云うと軍隊の仕来りで伍長、軍曹か兵  
長がなったが、選挙で選ぶことになり、管理委員3人  
が出て、俺23歳で初めての選挙。誰も選挙運動もし  
ない。俺より年上がいっぱいいるのに、選挙になっ  
たら俺が選ばれたのさ。さあ大変。石炭のところに行  
ってから8ヶ月位、帰還するまで小隊長を務めた。その  
代わり、ノルマが出来ない場合は責任取らされる。一  
晩牢屋に入った事もあった。代わりに人より責任者手  
当てが貰えるのさ。ここは、1日の労働賃金を払うと  
ころなので驚いた。収容所でもこんな処が在るのかと思  
ったな。場所はホマワンドの崖の4倍位の高さの下で、  
石炭は無限に有るんだ。まだ若くて黒くない茶色の石  
炭。そしたらロスケの将校が云うのには、もう30年か  
40年したら黒くなるが、その時になれば石炭も、油も  
要らない時代が来るんだって。原爆の原子。数十年後  
にはそうなったものな。大した将校だとその後思った。  
作業は1m四角の板に2人して石炭の上の土を取って  
投げただけ。ノルマは1人当たり10m<sup>2</sup>位かな。土方(ど  
かた)モッコ(ムシロを半分に折って紐を通して作り、  
2人で担ぐもの)なら5倍位も運べると思った。それで  
賃金単価が高いのさ。1日20ルーブル位、普通の作

業の倍ぐらいになるんだ。月精算で1人手取り金額が  
決められて、それ以上は受け取れない。残った金額は  
全部貯金して、寄越さない。帰還の時にはロスケのや  
つ幾ら貯金したか知って居ても、返してなんか寄越さ  
ないさ。毎日夕食は食堂で食べないで、日本人が料理し  
た物をレストランで食ったな。そのメニューは今思い出  
すと5品位かな。その中でも天井は今でも思い出す。  
美味かったなあ。後のものは何食べたか思い出せない。  
俺は捕虜で4年間あちこち移動したけど、後で同年兵  
に聞くと、どうやら良い所ばかり歩いて居た様だ。話が  
作業に戻るが、石炭掘るタイヤショベルの大きいので  
キャタピラが片方3m位のが3個、両方で6個。幅  
1m位、高さ運転台迄梯子で3m以上あったな。後年、  
そのショベルが大阪万博に1/1000になって出品され  
ていたのでびっくりした。このショベルで石炭と土砂を  
数十mの貨車に積み運搬する。もうひとつ。発破の穴  
を揉む機械の大きいのに吃驚。誰かドイツ製ではない  
かとか。ドイツといえば又馬の大きいのと云ったら、日  
本ではあんなでかい馬見たことが無い。馬の足は日本  
の馬の倍位。水の運搬に使っていたよ。

ライチハでは、食べる物は豊富、腹減ることも無いし、  
毎日いつ帰れるか、その話ばかり。その内に帰すべ  
体だけ気付いていればと、毎日それだけ。帰りたくて、  
伐採中にマサカリで自分の手の指2本を第2関節から  
切断して入院し、帰った人もいたよ。俺は指失くしてま  
でも・・・と思っていた。そんな頃、ダモイが近くなった  
噂が流れて来た

## ダモイ

だんだんとダモイの話が広まり、「おーい、帰りが近  
くなったなあ」と云う人や、「ロスケのことだから分  
からない」と云う人や様ざま。いよいよ来るべき日が  
やって来たよ。7月の中旬と思う。外にビヤ樽を10個  
も20個も出して、洩れない様にするために水を張って  
いたのを誰かが見て大騒ぎ。なぜなら、樽は水をあら  
かじめ張って木を膨張させた上で使用するのさ。この  
作業が行われれば、飲料水のための樽が準備されて  
おり、近々長距離の移動があることが予想できたからだ  
(ちなみに沿海州にはじめて渡って以降、別のラーゲ  
ルへの移動はすべて鉄道であった)。その内にロスケの

事務所に呼ばれた各小隊長が、順番に「各隊に反ロシアの兵隊居るか居ないか」「帰ったら資本主義でなく共産主義を受け入れるか」などをロスケの将校の前で聞かれた。共産党の様な話をしたら喜んで「良いヤポンスケ、日本人ダモイ、ダモイ（帰っても良い）」と、やあやあ、その時跳ねたものなあー。そこに通訳が居て「お前の隊に警察が1人、佐藤と云う逃亡者1名がいるが、その2人はどうか」と尋ねられた。俺は「2人とも共産党の心持で、帰ったら共産黨員になると云っている」と答弁したら、将校2〜3人して何かひそひそ話していたが「一緒に帰っても良い」と命令が出たんだ。警察の人は内地の人の様だったなあ。宿舎ではみんなメシも食わずに俺が帰るのを待ってたもんだ。「おい、俺の隊は全員ダモイが出たぞう」と云ったら、喜ぶ人や泣く人や大騒ぎ。その夜は誰も寝なかった。警察の人は泣いて喜んでいたなあ。

いよいよダモイが決まった。それから2〜3日かなー。今まで貯金していたお金のことを言い出した。「隊長やっぱロスケはあの金取ったんだ、ロスケは狡い」と云っていたら、宿舎の前に10トトラックが来て、ロスケの本部の方から一人一人名前を云って、今まで預けた貯金の支払いをすると云うので全員受け取った。さて、その次は、1000人位の兵隊の前でロスケの将校が、「ヤポンスケ、長い間御苦勞様でした」と挨拶したなあ。そして「今みんなに支払いした金は、日本に持って帰っても使われないのでここで使ってくれ」と続けたなあ。次の日10トトラック10台か15台が、衣類はトラック1台。菓子類も1台。時計も1台とめいめい違う車。1000人の人が帰るんだから大変。行列作って並んでさあー。ズボン、Yシャツ、菓子、お金のあるだけ・・・

話は前に戻るが、ダモイの話になってから数日後、1500名の兵隊大広場に集められて一人一人名前を呼ぶんだ。呼ばれた人は別の場所に行って後ろ向きに並ぶ。アルファベットで呼ぶので、なかなか吉田が出てこない。最後から2番目位かな、ヨシダキンヤと呼ばれたときは、跳ねたのか踊ったのか未だに記憶がないなあ。後ろ向きに並んで、残るは500名。隣の人に「あんた生まれ何処だ」と聞いたら「北海道の利尻だ」「えっ利尻のどこだ」「美也頃（現在の利尻町新湊）、秋田谷一吉27歳」と云う。代わって「お前何処だ」と聞

かれた。「仙法志だ」と云ったら、「滝沢利一と云う人知っているか」と聞かれた。「俺の叔父さんだ」と云ったら吃驚して、軍隊初年兵の頃滝沢さんに大変世話になったんだって。工兵隊、今で云う上方の方。「やあ、そうかそうか」とそれから買い物も2人でして、ナホトカ港まで4〜5昼夜掛かるから、食べ物沢山買わないとだめだと、次から次と買ったなあ。とうとう朝になって、気持ちは帰った様な気でみんな大騒ぎ。まだ金が有るので日本には無い42度のウォッカを、珍しいと思って高かったが1本買った。

ダモイが決まってからロスケが送別会やってくれたんだ。ウォッカ飲んだら腰抜けて2人で俺を担いで寝せてくれた。面白いのと帰ることが出来る喜びと、腰抜けとはあの時の事かと今でも思っている。いよいよダモイの汽車が駅に来た。貨車の中にビヤ樽にいっぱい入れた飲み水。一つの貨車に30人位居たのかなあ。食べ物いっぱい詰めたリュックサック。もう気持ちは日本に着いた様。4日間位汽車に乗ったなあ。所々の駅で停車。大便小便の用を足した。線路の中でも、どこでも足した。その内に何処かの構内で停車。みんな寝ているうちにロスケの泥棒に、出口に居たひとの荷物を盗まれた。朝になって大騒ぎ、泥棒の多い所だもの。汽車は4日目にナホトカの駅に着いた。1000人の人が移動するのだから大変なんだ。そこで1週間宿舎に付いた。ロスケの兵隊も何十棟と並ぶ同じ宿舎であったなあー。ロスケは、日本に帰るべく集合しているのに日本が船を出さないんだ、と云っていた。その内誰からか、書いたもの1つでも持っていれば船に乗せないって、又服装検査するんだって。又捕虜に逆戻りするんだ、とか色々な話が飛んだ。

#### 舞鶴へ

いよいよ日本から興安丸、運搬船5000トン位かな。さて乗船。一人一人名前を呼ぶんだ。大きな声出してタラップを登って船の上。やあーこれで家に帰れる。やあーこれで、と涙流した。船の上では牛肉1頭のまんまぶら下げているが、みんなそれどころではない。早く出港すればと・・・

いよいよ船は出港した。運搬船だからダンブルに室を二段三段と作ってあった。上から見れば眩暈するだ

け深かったなあ。夜が明けたら中に居る人は誰もいない。皆甲板に出て日本が早く見えないかと、船の先を見つめていた。船が遅いと云ってたなあ。次の朝、さあ、日本の舞鶴の山がかすかに見えた。その時はみんな泣いていたなあ。7月29日のことであった。

舞鶴港に到着後、本船から艇に乗って元海軍の宿舎に入り、持ち物検査だ。俺達は今まで帰った内で一番物持って来たと言った様で、何も見ないで煙草に印を押しただけ。その晩、風呂に入った。ゴボーの様にいっぺんに20人位入るんだ。4年振りだもの、誰もすぐ上がる人は居ないんだ。宿舎の裏は内地竹がいっぱい生えていた。2日くらい泊まっていたが、その内めいめいの故郷へ帰途についた。俺と秋田谷は日本海回りの汽車に乗って秋田で一時休んだ。30分くらいかなあ。そしたら秋田の婦人会の人達がお茶を出してな。みんなメンコク見えたなあ。「秋田の人は美人が多いのかなあ」と秋田谷に云ったら、「小町娘と云ってなあ」と云っていた。秋田谷とは小樽で別れ、下車した。小樽では、野村の叔母さん、駅まで迎えに来てなあ。その晩何食べたか思い出せない。その時、松谷のシマ（現豊富在住）の親が樺太から小樽に来て居たんだ。松谷に行って大事に持って来たウオッカをじいちゃんに呉れて来たんだ。今でも覚えている。

## 故郷へ

8月2日、いよいよ利尻の仙志志神磯に着いたら、「やー、良く生きて帰って来たなあ」と、田中さんだったか、山本さんだったかなあ、思い出せないが部落会長さんが迎えてくれた。自分の実家に泊まり、島をまわって時計屋をしていた笹本さんも来てくれて、すぐ三吉神社に御参りに連れて行かれた。「共産黨員になったか」と聞かれてなあ。それから何日目かに昆布採りで、ホマ場所沖の袋取り。すぐ側で寺田の昭一が採っていたな。俺が兵隊に行く時、子供と思っていたのがねじり鉢巻して昆布捻じっていて吃驚した。その晩、体中痛くて痛くて一晩朝まで眠れなかった。帰国直前まで、

ライチハで石炭の露天掘りの隊長を何ヶ月もしていたから、鈍っていた体にとっては沖の仕事は重労働だったのだろう。

## 後日談

沿海州での強制労働から利尻に生還し、何十年もたった。平成も半ばとなった頃、急に戦友を思い出して姫路の市役所に佐野棟と云う人の尋ね人のお願いをしたら、1週間位で見つかった。あの佐野棟伍長である。何十年振りで、それからずっと音信を交わしたが、2015（平成27）年に亡くなられた。

一方、山村は俺よりも2年ぐらゐ早く帰国できたらしい。俺の住所をもちろん覚えてくれていて、俺が帰国するまで、実家に毎月手紙を出し続けてくれていた。1955（昭和30）年、とうとう山村が利尻にやってきて、スケソウダラ漁の手伝いなどをしながら1ヶ月ほど滞在した。山村は八戸（青森）出身だったので、その後もリンゴを送ってくれたり、俺も青森に行ったりしていたが、2010（平成22）年頃亡くなってしまった。

帰国後もずっと気になっていた「十勝の人」は、その後、遺族会などに問い合わせをして64年ぶりに幕別・広尾町内にそのご家族がいることを突き止めることができた。その一方、自分を看病してくれた「山形の人」、豊原の爆撃で大怪我をしていた女の子、などの心残りもあり、これらのことに決着がつかなければ、俺の戦後は決して終わることはないだろう。

## 参考文献

- 厚生労働省、2018。強制抑留の実態調査等に関する基本的な方針（平成23年8月5日、閣議決定）。ダウンロード、<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hokabunya/senbotsusha/torikumi/120712.html>（2018年10月16日参照）
- 吉田欽哉、2009。シベリヤ抑留手記。22p。自刊。